

線形リー群について

中嶋 慧

July 25, 2019

Contents

1	線形リー群とリー代数	1
2	構造定数	2
3	ゲージ場の変換則： $\partial_\mu T \cdot T^{-1}$ について	3
4	リー群の随伴表現	4
5	リー代数の随伴表現	5
6	$\partial_\mu T \cdot T^{-1}$ について：その 2	6
7	構造定数の完全反対称性	8

1 線形リー群とリー代数

複素数の行列要素を持つ N 次正方行列の全体を $M(N, \mathbb{C})$ と書く。 $M(N, \mathbb{C})$ のうち、行列式が 0 でないもの全体を $GL(N, \mathbb{C})$ と書く。 $GL(N, \mathbb{C})$ の閉部分群を線形リー群と言う。 G を線形リー群とする。リー代数 \mathfrak{g} を、

$$\mathfrak{g} = \{X \in M(N, \mathbb{C}) \mid \forall a \in \mathbb{R}, \exp(aX) \in G\} \quad (1.1)$$

で定義する。 \mathfrak{g} の任意の元 A, B について、

$$aA \in \mathfrak{g} \ (a \in \mathbb{R}), \quad A + B \in \mathfrak{g}, \quad [A, B] \stackrel{\text{def}}{=} AB - BA \in \mathfrak{g} \quad (1.2)$$

となる。 $\{\mathbf{G}_r\}_{r=1}^n$ をリー代数の基底とすると、 \mathfrak{g} の任意 X は、実数 c^r を用いて、 $X = c^r \mathbf{G}_r$ と一意的に書ける。 \mathbf{G}_r をリー群 G の生成子ともいう。 n はリー群の次元である。

$\mathbf{T}(\varepsilon)$ を線形リー群の元とすると、単位元の近くで、

$$\mathbf{T}(\varepsilon) = \exp[\varepsilon^r \mathbf{G}_r] \quad (1.3)$$

と書ける [2]。 ε^r は実パラメーターである。すべての r に対して $\varepsilon^r = 0$ のときが単位元となる。コンパクト (パラメーターの範囲が有限) で連結な線形リー群¹⁾の任意の元は、この形で書ける [2] が、一般には、この形で書けるとは限らない²⁾。

2 構造定数

線形リー群 G は n 次元多様体である (この多様体を \tilde{G} と書く。 $G = \tilde{G}$ である³⁾)。 \tilde{G} の任意の点 P は G の元 $\mathbf{T}(P)$ と対応し、 \tilde{G} の任意の 2 点 P, Q に対して、 $\mathbf{T}(R) = \mathbf{T}(P)\mathbf{T}(Q)$ となる \tilde{G} の点 R が 1 つ存在する。 \tilde{G} は局所的には、 n 個の実パラメーター $\{\varepsilon^r\}_{r=1}^n$ で表されるが、 \tilde{G} を 1 つの座標系 $\{\varepsilon^r\}_{r=1}^n$ で表せるとは限らない。例えば、 $\mathbf{T}(P), \mathbf{T}(Q)$ が (1.3) の形で書いても、 $\mathbf{T}(P)\mathbf{T}(Q)$ が (1.3) の形で書けるとは限らない。

ここでは、 $P, Q \in \tilde{G}$ と $\mathbf{T}(R) = \mathbf{T}(P)\mathbf{T}(Q)$ で決まる $R \in \tilde{G}$ とが同じ座標系で表せる場合を考える⁴⁾。この座標系は原点 O (すなわち、 $\mathbf{T}(O) = 1$ (単位元) となる点) を含むとする。 P, Q, R の座標を a, b, c とすると、

$$\mathbf{T}(c) = \mathbf{T}(a)\mathbf{T}(b) \quad (2.1)$$

となる。ここで、 $\mathbf{T}(a) = \mathbf{T}(P)$ などである。 $\mathbf{T}(\varepsilon)$ は ε^r について任意の階数まで微分可能とする。原点 O の座標は 0 である。 c は a, b の関数であり、

$$c^r = f^r(a, b) \quad (2.2)$$

とかく。 $f^r(a, b)$ は以下の性質を持つ：

$$f^r(a, f(b, c)) = f^r(f(a, b), c), \quad (2.3)$$

$$f^r(a, 0) = f^r(0, a) = a^r. \quad (2.4)$$

また、 $f^r(a, b)$ は a, b について任意の階数まで連続微分可能とする。

ここで、特に、 $\mathbf{T}(\varepsilon)$ が (1.3) の形だとする。 (2.1) を a^r, b^s で微分した後、 a, b をすべて 0 と置くと、

$$\begin{aligned} \frac{\partial^2 \mathbf{T}(c)}{\partial c^k \partial c^l} \Big|_{c=0} & \frac{\partial f^l(a, b)}{\partial a^r} \Big|_{a, b=0} \frac{\partial f^k(a, b)}{\partial b^s} \Big|_{a, b=0} \\ & + \frac{\partial^2 f^p(a, b)}{\partial a^r \partial b^s} \Big|_{a, b=0} \mathbf{G}_p = \mathbf{G}_r \mathbf{G}_s \end{aligned} \quad (2.5)$$

を得る。ここで、 (1.3) より、

$$\frac{\partial \mathbf{T}(\varepsilon)}{\partial \varepsilon^r} \Big|_{\varepsilon=0} = \mathbf{G}_r \quad (2.6)$$

¹⁾ $U(n), SU(n), SO(n), Sp(n)$ は連結なコンパクト群である [2]。

²⁾ 線形リー群の元は一般には (6.6) の形で書ける。

³⁾ つまり、 G と \tilde{G} とは 1 対 1 で対応し、同一視できる。

⁴⁾ 単位元の近くに限定すれば、これは可能である。

であることを用いた。(2.4) より、

$$\left. \frac{\partial f^l(a, b)}{\partial a^r} \right|_{b=0} = \delta_r^l, \quad \left. \frac{\partial f^k(a, b)}{\partial b^s} \right|_{a=0} = \delta_s^k \quad (2.7)$$

なので、(2.5) は、

$$\left. \frac{\partial^2 \mathbf{T}(c)}{\partial c^r \partial c^s} \right|_{c=0} + \left. \frac{\partial^2 f^p(a, b)}{\partial a^r \partial b^s} \right|_{a, b=0} \mathbf{G}_p = \mathbf{G}_r \mathbf{G}_s \quad (2.8)$$

となる。 r, s を入れ換えた式との差を計算して、

$$[\mathbf{G}_r, \mathbf{G}_s] = \mathbf{G}_r \mathbf{G}_s - \mathbf{G}_s \mathbf{G}_r = f_{rs}^p \mathbf{G}_p, \quad (2.9)$$

$$f_{rs}^p \stackrel{\text{def}}{=} \left. \frac{\partial^2 f^p(a, b)}{\partial a^r \partial b^s} \right|_{a, b=0} - \left. \frac{\partial^2 f^p(a, b)}{\partial a^s \partial b^r} \right|_{a, b=0} \quad (2.10)$$

となる。 f_{rs}^p は構造定数と呼ばれる実数である。 f_{rs}^p は、パラメーターの結合則を表す関数 $f^p(a, b)$ により完全に決定される。パラメーターの取り方を変えると、 $f^p(a, b)$ や構造定数、基底 \mathbf{G}_r も変化する。

3 ゲージ場の変換則： $\partial_\mu \mathbf{T} \cdot \mathbf{T}^{-1}$ について

この節は [1] を参考にした。

A_μ^r をゲージ場とすると、

$$\mathbf{A}_\mu \stackrel{\text{def}}{=} A_\mu^r \mathbf{G}_r \quad (3.1)$$

は、次のように変換される：

$$\mathbf{A}'_\mu = \mathbf{T} \mathbf{A}_\mu \mathbf{T}^{-1} - \partial_\mu \mathbf{T} \cdot \mathbf{T}^{-1}. \quad (3.2)$$

以下では、 $\partial_\mu \mathbf{T} \cdot \mathbf{T}^{-1}$ について調べる。

(2.1) を a^r で微分して、 $a^r = 0$ と置くと、

$$\left. \frac{\partial \mathbf{T}(c)}{\partial c^s} \right|_{a=0} \left. \frac{\partial f^s(a, b)}{\partial a^r} \right|_{a=0} = \mathbf{G}_r \mathbf{T}(b) \quad (3.3)$$

となる⁵⁾。今、

$$f_r^s(a, b) \stackrel{\text{def}}{=} \frac{\partial f^s(a, b)}{\partial a^r}, \quad (3.4)$$

$$L_r^s(b) \stackrel{\text{def}}{=} f_r^s(0, b) \quad (3.5)$$

とすると、(3.3) は、

$$\left. \frac{\partial \mathbf{T}(b)}{\partial b^s} \right|_{a=0} L_r^s(b) = \mathbf{G}_r \mathbf{T}(b) \quad (3.6)$$

⁵⁾線形リー群 G が連結成分の組 $\{G_i\}$ からなり、各 G_i の任意の元は1つの座標 $a = \{a^r\}_{r=1}^n$ で表される場合を考える。このとき、 $\tilde{a} \stackrel{\text{def}}{=} (a, i)$ で G の任意の元を表すことが出来る。この場合は、(3.3) から (4.10) まで、 a, b, c を $\tilde{a}, \tilde{b}, \tilde{c}$ の意味で理解すれば良い。

となる。ところで、 $L_s^s(b)$ の逆行列 $(L^{-1})^r_s(b)$ の存在は、次のようにして分かる。(2.3) を a^s で微分して、

$$f_s^r(a, f(b, c)) = f_t^r(f(a, b), c) f_s^t(a, b) \quad (3.7)$$

を得る。(3.7) で $a = 0$ と置くと、

$$L_s^r(f(b, c)) = f_t^r(b, c) L_s^t(b) \quad (3.8)$$

となる。今、 $[\mathbf{T}(b)]^{-1} = \mathbf{T}(b^{-1})$ で、 b^{-1} を定義する。このとき、 $f^r(b, b^{-1}) = 0$ である。上式で、 $c = b^{-1}$ とすると、

$$\delta_s^r = f_t^r(b, b^{-1}) L_s^t(b) \quad (3.9)$$

を得る。ここで、

$$\begin{aligned} L_s^r(0) &= \left. \frac{\partial f^s(a, b)}{\partial a^r} \right|_{a=0, b=0} \\ &= \left. \frac{\partial f^s(a, 0)}{\partial a^r} \right|_{a=0} = \left. \frac{\partial a^s}{\partial a^r} \right|_{a=0} = \delta_s^r \end{aligned} \quad (3.10)$$

を用いた。(3.9) より、

$$(L^{-1})^r_t(b) = f_t^r(b, b^{-1}) \quad (3.11)$$

を得る。よって、(3.6) より、

$$\frac{\partial \mathbf{T}(b)}{\partial b^s} \mathbf{T}^{-1}(b) = \mathbf{G}_r (L^{-1})^r_s(b) \quad (3.12)$$

を得る。これより、

$$\begin{aligned} \partial_\mu \mathbf{T}(\varepsilon(x)) \cdot \mathbf{T}^{-1}(\varepsilon(x)) &= \partial_\mu \varepsilon^s(x) \frac{\partial \mathbf{T}(\varepsilon)}{\partial \varepsilon^s} \mathbf{T}^{-1}(\varepsilon) \\ &= \mathbf{G}_r (L^{-1})^r_s(\varepsilon(x)) \partial_\mu \varepsilon^s(x) \end{aligned} \quad (3.13)$$

を得る。

4 リー群の随伴表現

$X \in G, A \in \mathfrak{g}$ とすると、

$$X e^A X^{-1} = e^{X A X^{-1}} \in G \quad (4.1)$$

なので、

$$X A X^{-1} \in \mathfrak{g} \quad (4.2)$$

である。特に、 $X \mathbf{G}_r X^{-1} \in \mathfrak{g}$ なので、

$$X \mathbf{G}_r X^{-1} = [\text{Ad}(X)]^s_r \mathbf{G}_r \quad (4.3)$$

と書ける。[Ad(X)]_r^s は実数である。Ad は群 G の表現となる。これは G の随伴表現と呼ばれる。
この節の以下は [1] を参考にした。

以下で、

$$[\text{Ad}(\mathbf{T}(a))]_s^r = (L^{-1})_t^r(a) R_s^t(a) \quad (4.4)$$

を示そう。ここで、

$$R_s^r(a) \stackrel{\text{def}}{=} f_s^r(a, 0), \quad (4.5)$$

$$f_s^r(a, b) \stackrel{\text{def}}{=} \frac{f^r(a, b)}{\partial b^s} \quad (4.6)$$

である。まず、

$$c^r \stackrel{\text{def}}{=} f^r(f(a, b), a^{-1}) \quad (4.7)$$

とすると、

$$\mathbf{T}(c) = \mathbf{T}(a)\mathbf{T}(b)\mathbf{T}^{-1}(a) \quad (4.8)$$

である。 $\mathbf{T}(a^{-1}) = \mathbf{T}^{-1}(a)$ を用いた。上式を b^s で微分して、

$$\frac{\partial \mathbf{T}(c)}{\partial c^r} f_t^r(f(a, b), a^{-1}) f_s^t(a, b) = \mathbf{T}(a) \frac{\partial \mathbf{T}(b)}{\partial b^s} \mathbf{T}^{-1}(a) \quad (4.9)$$

となる。 $b = 0$ とすると、 $c^r = 0$ となるので、

$$\mathbf{G}_r f_t^r(a, a^{-1}) R_s^t(a) = \mathbf{T}(a) \mathbf{G}_s \mathbf{T}^{-1}(a) \quad (4.10)$$

となる。上式と (3.11) より、(4.4) を得る。

5 リー代数の随伴表現

今、 $X \in G$ が実数 s を用いて、

$$X = e^{sB} \quad (5.1)$$

と書けるとする。このとき、

$$\text{Ad}(X) =: \exp(s \cdot \text{ad}(B)) \quad (5.2)$$

で行列 $\text{ad}(B)$ を定める。定義より、

$$e^{sB} \mathbf{G}_r e^{-sB} = \mathbf{G}_s [\exp(s \cdot \text{ad}(B))]_r^s \quad (5.3)$$

である。 s で微分した後に $s = 0$ と置いて、

$$[B, \mathbf{G}_r] = \mathbf{G}_t [\text{ad}(B)]_r^t \quad (5.4)$$

を得る。よって、 ad は線形写像であり、

$$\text{ad}(\varepsilon^r \mathbf{G}_r) = \varepsilon^r \text{ad}(\mathbf{G}_r) \quad (5.5)$$

である。 $\text{ad}(B)$ はリー代数の随伴表現と呼ばれる。(5.4) で $B = \mathbf{G}_s$ として、

$$(f^t_{sr} \mathbf{G}_t =)[\mathbf{G}_s, \mathbf{G}_r] = \mathbf{G}_t [\text{ad}(\mathbf{G}_s)]^t_r, \quad (5.6)$$

すなわち、

$$[\text{ad}(\mathbf{G}_s)]^t_r = f^t_{sr} \quad (5.7)$$

を得る。

$\mathbf{T} \in G$ が、 $\mathbf{T} = \exp(\varepsilon^r \mathbf{G}_r)$ と書けるとき、

$$\text{Ad}(\mathbf{T}) = \exp(\varepsilon^r \text{ad}(\mathbf{G}_r)) \quad (5.8)$$

である。よって、

$$\mathbf{T} \mathbf{G}_r \mathbf{T}^{-1} = [\exp(\mathbf{e})]_r^s \mathbf{G}_s, \quad \mathbf{e} \stackrel{\text{def}}{=} \varepsilon^r \text{ad}(\mathbf{G}_r) \quad (5.9)$$

となる。

6 $\partial_\mu \mathbf{T} \cdot \mathbf{T}^{-1}$ について：その2

$\mathbf{E} \stackrel{\text{def}}{=} \varepsilon^r \mathbf{G}_r$ と置く。 $\mathbf{T} \in G$ が、 $\mathbf{T} = e^{\mathbf{E}}$ と書けるとき、

$$\partial_\mu \mathbf{T} = \int_0^1 ds e^{s\mathbf{E}} \partial_\mu \mathbf{E} e^{(1-s)\mathbf{E}} \quad (6.1)$$

となる。ここで、公式

$$\frac{\partial e^{H(\alpha)}}{\partial \alpha^n} = \int_0^1 ds e^{sH(\alpha)} \frac{\partial H(\alpha)}{\partial \alpha^n} e^{(1-s)H(\alpha)} \quad (6.2)$$

を用いた。 $\alpha = \{\alpha^n\}$ はパラメータ α^n の組である⁶⁾。

⁶⁾(6.2) は次のように示される。今、

$$C(x) \stackrel{\text{def}}{=} e^{-xH(\alpha)} \frac{\partial}{\partial \alpha^n} e^{xH(\alpha)}$$

と置くと、 $C(0) = 0$ であり、 $C(x)$ は、

$$\frac{dC(x)}{dx} = e^{-xH(\alpha)} \frac{\partial H(\alpha)}{\partial \alpha^n} e^{xH(\alpha)}$$

を満たす。上式を $x = 0$ から $x = 1$ まで積分して、

$$C(1) = e^{-H(\alpha)} \frac{\partial e^{H(\alpha)}}{\partial \alpha^n} = \int_0^1 dx e^{-xH(\alpha)} \frac{\partial H(\alpha)}{\partial \alpha^n} e^{xH(\alpha)}$$

を得る。これに左から $e^{H(\alpha)}$ をかけて (6.2) を得る。

(6.1) より、

$$\begin{aligned}
\partial_\mu \mathbf{T} \cdot \mathbf{T}^{-1} &= \int_0^1 ds e^{s\mathbf{E}} \partial_\mu \mathbf{E} e^{-s\mathbf{E}} \\
&= \partial_\mu \varepsilon^r \int_0^1 ds e^{s\mathbf{E}} \mathbf{G}_r e^{-s\mathbf{E}} \\
&= \partial_\mu \varepsilon^r \mathbf{G}_s \int_0^1 ds [\exp(s\mathbf{e})]_r^s =: \partial_\mu \varepsilon^r \mathbf{G}_s l_r^s(\mathbf{e})
\end{aligned} \tag{6.3}$$

となる。ここで、

$$l_r^s(\mathbf{e}) = \int_0^1 ds [\exp(s\mathbf{e})]_r^s = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{1}{(n+1)!} [e^n]_r^s \tag{6.4}$$

である。

$\mathbf{T}(\varepsilon)$ が $\mathbf{T} = e^{\mathbf{E}} (\mathbf{E} \in \mathfrak{g})$ の形で書けない場合を考える。まず、線形リー群の連結成分について復習する。集合 A の 2 元 a, b が結ばれているとは、 a を始点、 b を終点とする、 A に含まれる連続曲線が存在することである。 A の元 a と A 内で結ばれている元の集合を $C(a)$ と書き、 a を含む連結成分という。線形リー群 G の単位元を含む連結成分を G_0 とする。このとき、 G の元 g を含む連結成分 $C(g)$ は、 $C(g) = gG_0 = G_0g$ と書ける [2, 3]。また、 G_0 の任意の元 \mathbf{T}_0 は、 G のリー代数 \mathfrak{g} の有限個の元 $\mathbf{E}_1, \mathbf{E}_2, \dots, \mathbf{E}_n$ を用いて、

$$\mathbf{T}_0 = \exp(\mathbf{E}_1) \exp(\mathbf{E}_2) \cdots \exp(\mathbf{E}_n) \tag{6.5}$$

と書ける [2, 3]。上の 2 つの定理より、 $\mathbf{T}(x)$ (x は時空の座標⁷⁾) が G のある連結成分 G_i の元するとき、 G_i の x に依らない元 \mathbf{T}_i と、 G_0 の元 $\mathbf{T}_0(x)$ が存在し、

$$\mathbf{T}(x) = \mathbf{T}_0(x) \mathbf{T}_i, \tag{6.6}$$

$$\mathbf{T}_0(x) = \exp(\mathbf{E}_1(x)) \exp(\mathbf{E}_2(x)) \cdots \exp(\mathbf{E}_n(x)) \tag{6.7}$$

と書ける。特に、 $G_i = G_0$ のとき、 $\mathbf{T}_i = 1$ (単位元) である。さて、 $\mathbf{E}_k(x) = \varepsilon_{(k)}^r(x) \mathbf{G}_r$ と書くと、(6.3) より、

$$\partial_\mu e^{\mathbf{E}_k(x)} \cdot e^{-\mathbf{E}_k(x)} = (\alpha^{(k)}(x))_s^r \mathbf{G}_r \partial_\mu \varepsilon_{(k)}^s \tag{6.8}$$

と書ける。 $(\alpha^{(k)}(x))_s^r$ は実数である。また、(4.2) であるから、(6.6) より、

$$\partial_\mu \mathbf{T} \cdot \mathbf{T}^{-1} = \sum_{k=1}^n (\beta^{(k)}(x))_s^r \mathbf{G}_r \partial_\mu \varepsilon_{(k)}^s \tag{6.9}$$

となる。 $(\beta^{(k)}(x))_s^r$ は実数である。よって、 $\partial_\mu \mathbf{T} \cdot \mathbf{T}^{-1}$ は \mathbf{G}_r の線形結合で書ける。

⁷⁾ より一般には、 x がある多様体の座標でも良い。

7 構造定数の完全反対称性

ヤコビ恒等式

$$[[\mathbf{G}_r, \mathbf{G}_s], \mathbf{G}_t] + [[\mathbf{G}_s, \mathbf{G}_t], \mathbf{G}_r] + [[\mathbf{G}_t, \mathbf{G}_r], \mathbf{G}_s] = 0 \quad (7.1)$$

より、

$$f_{rs}^p f_{pt}^q + f_{st}^p f_{pr}^q + f_{tr}^p f_{ps}^q = 0 \quad (7.2)$$

を得る。これと (5.7) より、

$$[\text{ad}(\mathbf{G}_s), \text{ad}(\mathbf{G}_r)] = \text{ad}(\mathbf{G}_t) f_{sr}^t \quad (7.3)$$

を得る。これは、 $\text{ad}(\mathbf{G}_s)$ がリー代数 \mathfrak{g} の表現であることを表す。

(7.3) に $\text{ad}(\mathbf{G}_u)$ をかけてトレースを取ると、

$$\text{Tr}([\text{ad}(\mathbf{G}_s), \text{ad}(\mathbf{G}_r)]\text{ad}(\mathbf{G}_u)) = -\kappa_{tu} f_{sr}^t \quad (7.4)$$

である。 $\kappa_{rs} \stackrel{\text{def}}{=} -f_{rv}^u f_{su}^v (= \kappa_{sr})$ は Killing 形式である。上式の左辺は、

$$\begin{aligned} \text{Tr}([\text{ad}(\mathbf{G}_s), \text{ad}(\mathbf{G}_r)]\text{ad}(\mathbf{G}_u)) &= \text{Tr}(\text{ad}(\mathbf{G}_r)[\text{ad}(\mathbf{G}_u), \text{ad}(\mathbf{G}_s)]) \\ &= \text{Tr}(\text{ad}(\mathbf{G}_r)\text{ad}(\mathbf{G}_t)) f_{us}^t \\ &= -\kappa_{rt} f_{us}^t \end{aligned} \quad (7.5)$$

なので、

$$\kappa_{rt} f_{us}^t = \kappa_{tu} f_{sr}^t \quad (7.6)$$

を得る。 $f_{abc} \stackrel{\text{def}}{=} \kappa_{ra} f_{bc}^r$ とすると、上式は、

$$f_{rus} = f_{usr} = -f_{urs} \quad (7.7)$$

を意味する。これより、 f_{abc} は完全反対称である。

References

- [1] 内山龍雄『一般ゲージ場論序説』(岩波書店, 1987年).
- [2] 佐藤光『群と物理』(丸善出版, 2016年).
- [3] 山内恭彦, 杉浦光夫『連続群論入門』(培風館, 1960年).